慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	周作人とJ・E・ハリソン：ギリシア神話とギリシア像を巡って
Sub Title	Zhou Zuoren and J. E. Harrison : Greek mythology, Greece
Author	根岸, 宗一郎(Negishi, Soichiro)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.7 (2014.) ,p.53- 72
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20140331-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

周作人とJ・E・ハリソン

――ギリシア神話とギリシア像を巡って

根岸宗一郎

ギリシア文化・文学の紹介に生涯に渡り力を注いだ周作人の思想において、ギリシア文化の在り方は、特にヨーロッパ近代と中国の問題・東西文明論を考察する上で非常に重要な意味を持っていたと考えられる。本稿は、ギリシア神話さらには古代ギリシア文化研究において大きな足跡を残し、周作人がギリシア文化・神話を語る際にしばしば参照したジェーン・エレン・ハリソン（Jane Ellen Harrison: 1850-1928）の研究が、周作人のギリシア像形成に与えた影響を考察するものである。なお、ハリソンの研究と関連の深い文化人類学的神話研究の創始者であるアンドルー・ラング（Andrew Lang: 1844-1912）、ギリシア悲劇の起源を論じた『悲劇の誕生[1]』によりハリソンに大きな影響を与えたニーチェ（Friedrich Nietzsche: 1844-1900）と、周作人との関連にも注目して論じたい。

一．ギリシア神話解釈――ラングからハリソンへ

周作人は、日本留学中、西洋文化・文学の二つの源流であるギリシア神話と聖書の学習を試みた。聖書については立教大学で聖書のギリシア語原典を学んでいる。一方、ギリシア神話について、周作人は次のように回想している。

> 当初は西洋文学を理解するためには、少しギリシア神話を知っておく必要があると聞いたので、参考書を一つ二つ探して読んだが、続いて神話自体に対して興味を持った。[2]

周作人は日本留学中（一九〇六～一一年）にギリシア神話に対する興味が芽生え、その後ギリシア神話の翻訳紹介を生涯行っていくことになった。『知堂回想録』[3]によると、兄の魯迅に伴われて日本に到着したとき、魯迅が中国への一時帰国前に丸善に注文していた洋書の小包が下宿に届いた。この中にゲイリー（Chalres Mills Gayley）の“The Classic Myths in English Literature”[4]を見出し、ギリシア神話への関心が芽生えたという。同書第一章には、当時ヨーロッパで隆盛となっていたアンドルー・ラング（Andrew Lang）に代表される文化人類学的神話学が紹介されている。これをきっかけに周作人はラングの“Custom and Myth”と“Myth, Ritual and Religion”を購入し、神話学更には文化人類学に関心を持ち始めた。そして、日本に来たばかりの一九〇六年秋から冬までの間に、ラングの本に基づいて日・月・星の神話について千字程度の『三辰神話』を、雑誌『新生』のために書く。[5]この後、

一九〇七年二月までに、ギリシア神話を題材としたラングとハガードの共著“The World's Desire”を『紅星佚史』の題で魯迅と共訳し、神々の名前について索引式の注釈を苦心して作成したという。[6]

ラングは、人類学者タイラー（Edward Tylor）の“Primitive Culture”（1871）の説[7]に基づき、ギリシアなどの神話に描かれた内容を、類似するアフリカやアメリカの未開種族の習俗を用いて解釈しようと試みた。古代ギリシアではすでに本来の意味が失われていても、アフリカやアメリカでは現在でも本来の意味をもって習俗が生きており、近代人の目からは不可解なギリシアなどの神話中の事柄の意味を解釈することが可能になるとラングは主張している。周作人はラングについて、『荷馬史詩（ホメーロスの叙事詩）』（一九一六年）において次のように述べている。

> イギリス人ラングが人類学の方法で神話を解釈して、初めてはっきり意味が分かるようになった。その方法は、現代の未開人の儀礼を用いて、古代における状況を実証するというものであり、荒唐無稽な言葉がおよそすべて事実に基づくものであることがわかる。[8]

周作人が、ラングの説を的確に捉え、評価していることがわかる。すでに指摘されているように、[9]周作人はラングの文化人類学的解釈を日本留学中（一九〇六～一一年）から晩年まで一貫して支持していた。一九一六年の『荷馬史詩（ホメーロスの叙事詩）』以来、周作人は神話を論ずる際、ラングの解釈をしばしば参照している。『續神話的辯護』（一九二四年四月一〇日）[10]では、ミュラーの比較神話学からラングの人類学的神話学への学説の変化を述べ、ラングの“Myth, Ritual and Religion”（1887）を引用しつつ、ギリシア神話の変身物語の解釈を述べている。また、

『神話的趣味』（一九二四年一二月五日）[11]でもラングの学説を踏まえて神話学を論じている。

しかし一方で、同じ年に書いた、ギリシア神話の典故を論じた『神話的典故』（一九二四年九月一〇日）[12]と『舎倫的故事（セイレーンの物語）』（一九二四年一〇月五日）[13]では、ラングには拠らず、ハリソンの“Prolegomena to the Study of Greek Religion”[14]（1903）（以下、“Prolegomena”と略す）第五章に基づいて、ギリシア神話に登場するスフィンクス、セイレーン等を解説している。日記によると周作人は、一九二四年七月一八日にハリソンの“Prolegomena”を手に入れている。

（神話研究については先ずラングの著作に啓発されたが：筆者）後になって、ギリシア神話を扱うようになってから更にフレーザーとハリソン女史の著作を手に入れ、更に一歩前進した。[15]

こう回想で述べているように、周作人は一九二四年にハリソンの“Prolegomena”を入手して以降、ギリシア神話の解釈に関する議論を展開する際には、常にハリソンの著作を参照して論じている。ところで、周作人は、『希臘神話一』（一九三四年三月）[16]で次のように述べている。

（ハリソンの研究には：筆者）『金枝篇』前後の人類学考古学の本も当然大きな関係があった。なぜなら古典学者はこれにより比較人類学がギリシア・ラテンの文化を理解するのに非常に助けになることを知ったからである。[17]

そして、ハリソンの学生時代の回想録“Reminiscences of a Student's Life”（1925）末節から次の部分を引用する。

タイラーは既に書きもし述べもしていた。ロバートソン・スミスは異端として外へ流され、すでに東方の星を見ていた。しかしどうにもならなかった。耳の聞こえない蛇である私たち古典学者は、なおも耳を塞ぎ目を閉ざしていた。しかし一たび（フレーザーの：筆者）『金の枝』の呪文の声を聞くや否や、目の上の鱗が落ち、私たちの耳は聞こえるようになり、理解したのである。つづいて、エバンズ（Arthur Evans）が彼の新たな島へと出発し、迷宮の中から電報でミノタウロスのニュースを報告した。そこで、私たちもこれが重要な事件であり、ホメーロスの問題と関係があることを認めない訳にはいかなくなった[18]。

文化人類学的な神話へのアプローチが、フレーザーの『金枝篇』（“The Golden Bough”, 1890）をきっかけにようやく古典研究の世界でも認められるようになったこと、またハリソンが早くから文化人類学的手法に共鳴していたことがわかる。ここに挙げられていないが、オックスフォード大学人類学初代教授であるタイラーの“Primitive Culture”（1871）の理論を神話解釈に用いて、“Custom and Myth”（1884）（タイラーに捧げられている）を書き、文化人類学的神話学を創始したのがアンドルー・ラングである。周作人がハリソンの神話研究をラングの文化人類学的神話学の延長上に見ていたのは妥当といえる。周作人は、ラングの文化人類学的解釈を前提とした上で、ハリソンの著作を手にしてからは、ギリシア神話を解説する際には、より詳しいハリソンのものを用いるようになったのである。次節ではハリソンについて詳しく見てみたい。

二　ハリソンのギリシア研究と周作人

一九世紀末から二〇世紀前半にかけて古代ギリシアの神話・宗教の研究で活躍し、神話儀礼学派の一人とされるケンブリッジ大学のジェーン・エレン・ハリソン（Jane Ellen Harrison）は、中国におけるギリシア神話さらにはギリシア文化の先駆的紹介者であった周作人が生涯にわたって拠り所とした人物である。周作人がハリソンの著作に初めて触れたのは、六年にわたる日本留学から帰国し、故郷の紹興で民俗学的活動を開始していた時期である。[19] これについて周作人は次のように述べている。

> 私が最初にハリソンの本を読んだのは民国二年（一九一三年：筆者）のことである。イギリスの「家庭大学叢書（Home University Library of Modern Knowledge）」の中に『古代芸術と儀式』（Ancient Art and Ritual, 1913）が出た。彼女がギリシア戯曲を借りて、芸術が儀式から変化してきた有様を説明しているのを非常に面白く感じた。（中略）重苦しいギリシア神話および宗教の学界に若干の新鮮な空気を送り込み、一般読者の興味を呼び起こすことができた。[20]

周作人がハリソンの“Ancient Art and Ritual”（1913）を高く評価していたことがわかる。“Ancient Art and Ritual”を入手した周作人は、一九一六年六月に古代ギリシアを題材としたマルセル・シュウォブ[21]の“Mimes”（『擬曲』）の翻訳序文で、悲劇・戯曲の成立を説明する際に同書を参照している。ハリソンの同書は、ギリシア悲劇の

誕生を、ギリシア古代の宗教儀式から変化して誕生したものとして説明したものである。ハリソンは、まず未開社会の部族の集団的情緒（豊作祈願、狩りの成功祈願など）を表現しようとする欲求が、作物の成育や狩りの成功を模倣する行為を生み、季節に合わせて周期的に行われるようになって宗教儀式が生まれたとする。古代ギリシアの春祭り（アテーナイのディオニュソス祭）もこうして生まれたものであり、その後次第に本来の情緒・祈りの感情が失われて模倣の動作のみが残って独立することによりギリシア悲劇の起源となったと論じている。周作人はハリソンの議論を要約して次のように述べている。

> 擬曲は、模倣の曲の意味である。古代ギリシアでは陰暦の二月に芽生えを促す祭りを行う（アテーナイのディオニュソス祭：筆者）。心に期待が生じて舞踏となり、そのため事物を模倣して、その感情を表現した。信仰が移り変わっても儀礼は変わらず、ただ模倣の動作だけが残り、すでに祈るという傾向がなくなったものが、擬曲の起源である。[22]

周作人がハリソンの理論を正確に把握していたことがわかる。先述のように、周作人は、この後一九二四年に“Prolegomena”を入手すると、この第五章‘Demonology of Ghosts, Spirits and Bogeys’に基づいてギリシア神話の典故について二篇を書いた。『神話的典故』（一九二四年九月一〇日）では、スフィンクスの解説を“Prolegomena”によって述べている。スフィンクスはもともと地母神である地下の妖怪（Ker）であり、人を捉えて食べたり殺したりする。地下の妖怪は予知能力があるので、預言者としての能力ももち、人々に謎々を出して、答えを間違うと殺すという伝説ができた、と解説している。また、『舎倫的故事（セイレーンの物語）』（一九二四年一〇月五日）

では、水の精セイレーンについて解説して次のように述べている。

ハリソン女史の研究によると、古代美術および宗教思想に基づいて考察すると、セイレーンはスフィンクス（Sphinx）等と同じく、もともとは一種の妖怪（Ker）であった。最初はただの死者の霊魂でしかなかったものが、想像により首から上は人、体は鳥となった。しかし、神人同形となる傾向が次第に勢力を持ち、霊魂もまた人の形となったが、翼だけが残り、昔の痕跡を示しているのである。そして鳥の体の女は死の凶悪な亡霊となり、死を迫り亡魂を招く使者、すなわちセイレーンとなったのである。[23]

ここで、ハリソンの“Prolegomena”（1903）について詳しく見てみたい。ハリソンは、“Prolegomena”において、ギリシアの宗教儀式の性格は大きく二つに分類できるとして、次のように述べている。

ギリシアの宗教が二つの異なる、正反対でもある要素をもっていることは明らかである。一方は「神への奉仕」（θεραπεία）[24]の要素であり、もう一方は「厄払い」（ἀποτροπή）[25]の要素である。「神への奉仕」の儀式はオリュンポス、あるいは時にウーラニアン（天上に住む神々）と呼ばれる神々にかかわる古代の風習であり、「厄払い」の儀式は幽霊や英雄たちや地下の神々にかかわるものである。[26]

そして、ハリソンは「厄払い」（“ἀποτροπή”）は見返りを期待せずただ魔を駆除するためだけのものであり、一方「神への奉仕」（“θεραπεία”）は見返りとしての神の恩恵を期待して神に奉仕するものとする。前者は、未開社

会において、食料（農作物など）のために悪い季節である冬を追い出し、春とともに作物を蘇生させて新たな食料を迎え入れることを祈ることから生じるもので、ギリシアの宗教儀式の初期段階にあたる。「神への奉仕」はオリュンポスの神々の信仰にあたり、ハリソンは前者から後者への移行を論証している。ハリソンは第一章で「厄払い」と「神への奉仕」という図式を示した後、第二章から第四章で、古代ギリシアの年中行事である宗教儀式、Diasia, Anthesteria, Thargelia, Thesmophoriaを分析する。そして周作人が参照した第五章では「厄払い」“ἀπομοιρή”から「神への奉仕」“θεραπεία”への移行過程を地母神信仰の変化により論証を行っている。

周作人は、日記によると一九二五年四月二〇日、ハリソンの“Mythology”（1924）を入手する。同書は、ギリシア・ローマ研究のコンパクトな叢書“Our Debt to Greece and Rome”の一冊として、ハリソンが“Prolegomena”等に基づいて書き下ろした一般向けの本である。周作人はこの“Mythology”について『論山母』の付記で次のように述べている。

> この『ギリシア神話』は一冊わずか百五十ページの小さな本だが、説明が要領を得ている。物語を語るのではなく、神々の起源と変遷を解説しているだけなので（ほぼあの“Prolegomena”に基づいている）、神話集ではなく神話学の性格をもっており、神話を理解する上で極めて役に立つ[27]。

周作人が“Mythology”を“Prolegomena”に基づく著作であると認識していたことがわかる。周作人は“Mythology”第三章からの抄訳（第一節の訳）を、『論鬼臉』（一九二五年八月三一日[28]）の題で発表する。この後さ

らに、“Mythology”Introduction’の全訳『「希臘神話」引言』（一九二六年八月二八日）[29]、“Mythology”第三章の全訳『論山母』（一九二八年一月一日）[30]を発表する。周作人が翻訳紹介した“Mythology”第三章は、『神話的典故』（一九二四年）と『舎倫的故事』（一九二四年）で基づいた“Prolegomena”Chapter V. ‘Demonology of Ghosts, Spirits and Bogeys’に基づいた部分である。『論鬼臉』の付記（一九二五年七月二三日付）には、「“Prolegomena”第五章「妖怪論」とほぼ同じ」[31]とあり、周作人も“Mythology”第三章を“Prolegomena”第五章に基づくものとして理解していたことがわかる。また、『論山母』付記（一九二七年一二月一一日付）で「この本の中の第三・四章の両章は私が最も好きなものである」[32]と述べ、第三章を一九二五年に抄訳、一九二八年に全訳していることから、周作人がこの第三章を重視していたことが窺われる。

第三章“The Mountain Mother”は、地母神の信仰における恐怖の除去を中心に論じている。第一節では、地母神自らが育んだ人間が死んだあと、それを（大地の）懐に抱きとり、死者たちの守護者として、敵対する人間や霊を追い払うという地母神の側面に着目してゴルゴンを論じる。悪人や悪霊を払うため儀式等で用いられる凶悪な面のゴルゴネイオン（ゴルゴンの仮面）がゴルゴンの原型であったとする。そして、もとは顔しかなかったものが、後からギリシア神話の作者たちにより体を付与されて怪物のゴルゴンとなり、さらにその醜さを除去されて、悲しみをたたえた乙女の顔に変化したとハリソンは述べている。第二節では復讐の女神たちエリニュエスから慈しみの女神たちエウメニデスへの変化を述べている。つまり、この第三章および“Prolegomena”第五章では、もともと凶悪な地母神であったゴルゴンやエリニュエスが、恐怖の要素を除去され美化されて、ギリシア神話に登場する美しい姿に変化する過程を論じているのである。そして、ハリソンが他の章で各地の地母神がヘラ、アテネ、アフロディテ、アルテミスなどオリュンポスの神々へと変容する過程を同様の論理で説明していることからも、第三章が

“Mythology”の要の章と言える。

ところで、周作人は、『論鬼臉』訳文末尾の次の一節に、ハリソンの原書にはない圏点もつけている。

宗教中の恐怖の要素を除去すること、これはギリシアの美術家と詩人の職務であった。そして、これは私たちがギリシア神話の作者に負う最大の借りである。[33]

“Mythology”（1924）は、ハリソンが主にかつての著書“Prolegomena”（1903）に基づいて一般向けに書き下ろした晩年の著作であるが、“Mythology”という題名から分かるようにギリシア神話に絞って執筆したものである。ハリソンはギリシア神話の意義、現代の私たちがギリシア神話に負う「借り」について同書の‘Conclusion’（結論）の章で次のように述べている。

この借りは二つの面がある。一つ目として私たちはギリシア神話に比類のないイメージの遺産の借りがある。（中略）二つ目は、後で見るように、このイメージと密接な関係があるものだが、部分的にであれ少なくとも致命的に恐怖に取りつかれることから人間精神を解放したことである。（中略）人間の生活を毒し麻痺させる恐怖をギリシア神話は宗教から除去したということである。（中略）いかにして恐怖は除去されたのか。美しいイメージを作り出すことによってである。[34]

そして、ヨーロッパ中世においてギリシア文化が衰え、ギリシアの神々の信仰がすたれることにより、恐怖が舞

い戻って人間精神が損なわれたとした上で、ハリソンは次のように述べる。

> 人間の恐怖はルネサンス、古代ギリシアの穏やかに美しいイメージを想像する習慣の復活によってようやく和らげられたのである。[35]

ハリソンは、美しいイメージを作り出すことによる恐怖の除去というギリシア文化の要素がルネサンスにおいて果たした役割の重要性を述べている。一方、周作人も『希臘閑話』（一九二六年）で、ギリシア文明の精神の特徴を「現世主義」と「愛美の精神」とした上で、ハリソン“Mythology”第三章の要約を例として出して次のように論じている。

> 以上はすべてギリシアが恐怖と醜悪とを美に変化させた顕著な例である。こうした「美化」の精神はギリシア人の現世主義と愛美の観念の充分な表れであり、文化の進化と極めて深い関係をもっている。ヨーロッパ中世の暗黒時代がルネサンスに変化したことは一つの実例と見なすことができる。[36]

周作人がハリソンの論じたギリシア文化における「恐怖の除去」「美化の精神」を、中世からルネサンスへの転換の原動力として位置付け、高く評価していたことがわかる。周作人はこの後、『希臘神話二』（一九三四年五月）、『我的雜學之六』（一九四四年六月）、『希臘之餘光』（一九四四年八月）[37]でも同様の主張を繰り返しており、ハリソンの理論基づき、ギリシア文化の「恐怖の除去」「美化の精神」を評価する見方は変わらなかったと言える。

ところで、ハリソンのギリシア文化における「恐怖の除去」「美化の精神」という論点はニーチェとかかわる部分であるので次の節で検討したい。

むすび　周作人のギリシア像とハリソン、ニーチェ

ハリソンとニーチェとの関係については、すでに指摘されているように、ハリソンの研究（ギリシア悲劇の起源研究である“Ancient Art and Ritual”を始め、“Prolegomena”等も）は、ギリシア悲劇の起源の研究として先駆的であったニーチェ『悲劇の誕生』（一八七二年）を踏まえている。[38] ハリソンは、一九〇九年一二月、神話儀礼学派の一人とされるオックスフォード大学のマレー（Gilbert Murray）に宛てた書簡で『悲劇の誕生』を読むよう勧めて次のように述べている。

> 私は『悲劇の誕生』を読み直していました。かりそめにもあなたが最近この本を読んだとしたなら。これは正に天才的です。もしもドイツ語がお嫌いでしたらフランス語の翻訳もあります。[39]

ニーチェは『悲劇の誕生』で、オリュンポスの神々に見られるようなギリシア文化の表面的に明朗で理性的な側面（アポロン的要素）のみを評価する従来の定説に対して、ギリシア文化の基層部分にディオニュソス的要素という非理性的な側面が存在することを指摘した。そして古代ギリシア文化においてディオニュソス的要素とアポロン的要素が相互に対立・止揚することで文学・文化が発展していき、その頂点としてギリシア悲劇が生み出されたと

論じている。すでに述べたように、ハリソンは、“Prolegomena”においてギリシアの宗教儀式の性格は大きく「厄払い」と「神への奉仕」の二つに分類できるとした。そして、ギリシアの宗教儀式の初期段階である前者から、オリュンポスの神々の信仰である後者への移行を論証していったが、ハリソンはギリシアの宗教儀式における「厄払い」の要素の重要性を次のように述べている。

> ギリシアの宗教は、表面的な晴れやかさにもかかわらず、その内側と下側により暗くより深い重要な要素をもっているのである。[40]

「厄払い」はニーチェがディオニュソス的要素として指摘したギリシア文化の基層部分にあたると考えて間違いあるまい。つまり、ハリソンは、ニーチェのディオニュソス的要素とアポロン的要素という構図を踏まえ、文化人類学的方法でディオニュソス的要素を分析し、さらにディオニュソス的要素からアポロン的要素への移行を論証したと言える。

ところで、ハリソンは“Themis”（1912）第二版への序（1927）で、ニーチェ『悲劇の誕生』に関連して次のように述べている。

> この（アポロン的要素とディオニュソス的要素という：筆者）問題については私はニーチェの弟子である。ダイモーンであるディオニュソス（現象の裏側にある苦痛の意思への逃避[41]）の陶酔だけでなく、オリュンポスの神であるアポロンの「形象における慰撫（仮象による救済[42]）」を、人間性はたぶん、より以上に必要として

いることを私は決して忘れるわけにはいかない。[43]

ハリソンはニーチェのアポロン的要素とディオニュソス的要素という論を踏まえながらも、アポロン的要素による「恐怖の除去」「美化の精神」の重要性を強調している。周作人が度々参照した、ハリソンの“Prolegomena”第五章と、その簡略版である“Mythology”第三章も、ギリシアの宗教における「厄払い」から「神への奉仕」への移行に見られる「恐怖の除去」「美化の精神」について述べたものである。つまり、周作人がハリソンを高く評価した理由は、ハリソンが「アポロン的要素」すなわち「恐怖の除去」「美化の精神」の重要性を強調している点に共鳴したためではなかったか。ニーチェ『悲劇の誕生』のアポロン的要素とディオニュソス的要素という枠組みと、ラングに代表される文化人類学的方法論を背景として、ハリソンが主張した「恐怖の除去」「美化の精神」は周作人のギリシア像において重要な位置を占めていたと言えよう。

注

（1）Friedrich Nietzsche “Die Geburt der Tragödie” (1827)

（2）「我的雑學之六」『苦口甘口』所収。一九四四年六月一一日刊『華北新報』初出。:「当初听说要懂西洋文学须得知道一点希腊神话，所以去找一两本参考书来看，后来对于神话本身有了兴趣。」:『周作人散文全集』（江西師範大学出版社、二〇〇九年四月）第九巻一九九頁。

（3）『知堂回想錄』（香港三育図書文具公司、一九七四年四月）「七三、籌備雑誌」（一九六一年五月四日作）。

（4）Chalres Mills Gayley “The Classic Myths in English Literature: based chiefly on Bulfinch’s ‘Age of Fable’ 1855” (1903)

（5）『知堂回想録』「七三、籌備雑誌」によると、兄の魯迅と計画した雑誌『新生』は刊行に至らなかったため、『三辰神話』の原稿は日の目を見ずに失われた。
（6）『知堂回想録』「七七、翻譯小說上」（一九六一年五月七日作）によると、注釈部分は出版社の判断で刊行時に削除されて日の目を見なかった。
（7）タイラー（Edward Tylor: 1832–1917）は、残存文化（過去の文化の遺物）の研究から人類の文化史を再構成することができるとした。
（8）『荷馬史詩（ホメーロスの叙事詩）』（一九一六年六月刊『爰社叢刊』第三期）：「自英人阑士以人类学法解释神话，乃始了然，其法以当世蛮荒之礼俗，印证上古之情状，而知凡是荒唐之言，皆本根于事实。」：『周作人散文全集』第一巻四八一頁。
（9）子安加余子『周作人とA・ラング―童話への理解―』：『中国への多角的アプローチ』（中央大学出版部。二〇一二年一月）所収。
（10）『續神話的辯護』（一九二四年四月一〇日刊『晨報副鐫』）。
（11）『神話的趣味』（一九二四年一二月五日刊『晨報・文學旬刊』）。
（12）『溝沿通信之六』（一九二四年九月一〇日刊『晨報副鐫』）。『雨天的書』収録時に『神話的典故』と改題。
（13）『舍倫的故事（セイレーンの物語）』（一九二四年一〇月五日刊『晨報副鐫』）。
（14）Chapter V. 'Demonology of Ghosts, Spirits and Bogeys'.
（15）『知堂回想録』七三「籌備雑誌」：「后来弄希腊神话，更得到茀来则与哈利孙女士的著作，更有进益」：『周作人散文全集』第十三巻三五九頁。
（16）『希臘神話一』（一九三四年三月刊『青年界』五巻三期）。
（17）「而《金枝》（The Golden Bough）前后的人类学考古学的书当然也很有关系，因为古典学者因此知道比较人类学在了解希腊拉丁的文化很有帮助了。」：『周作人散文全集』第六巻二四〇頁。

(18)「泰勒（Tylor）写过了也说过了，斯密斯（Robertson Smith）为异端而流放在外，已经看过了东方的星星了，可是无用，我们古典学者的聋蛇还是塞住了我们的耳朵，闭上了我们的眼睛。但是一听到《金枝》这句咒语的声音，眼上的鳞片便即落下了，我们听见，我们懂得了。随后伊文思（Arthur Evans）出发到他的新岛去，从它自己的迷宫里打电报来报告牛王（Minotauros）的消息，于是我们不得不承认这是一件重要的事件，这与荷马问题有关了。」：『周作人散文全集』第六巻二四〇～二四一頁。

(19) 周作人日記一九一六年三月二三日の項に“Ancient Art and Ritual”を入手したとあり、同月二六・二七・二九日の項にも同書名が見られ、二九日の項には読了とある。『希臘神話一』（一九三四年）に「一九一三年」とあるのは、あるいは、周作人の記憶違いか。

(20)『希臘神話一』（一九三四年三月刊『青年界』五巻三期）：「我最初读到哈理孙的书是在民国二年，英国的〝家庭大学丛书〟中出了一本《古代艺术与仪式》（Ancient Art and Ritual, 1913），觉得她借了希腊戏曲说明艺术从仪式转变过来的情形非常有意思，（中略）能够在沉闷的希腊神话及宗教学界上放进若干新鲜的空气，引起一般读者的兴趣」：『周作人散文全集』第六巻二三六頁。

(21) マルセル・シュウォブ（Marcel Schwob: 1867–1905）：フランスの作家。“Mimes”（1894）などのように古典ギリシア文学などに着想を得た作品を書いた。

(22)『擬曲五章』（一九一六年六月刊『爨社叢刊』第三期）：「擬曲者，言模擬之曲。古者希臘仲春之月，舉句萌之祭。心有所期，形于舞蹈，故模拟事物，表见其志。逮信仰转移，而礼仪未改，仅存模拟之动作，已无祈求之倾向，戏曲起源，即本于此（见英国哈利森女士著《古代仪式与艺术》）。」：『周作人散文全集』第一巻四五七頁。

(23)『舍倫的故事』（一九二四年一〇月五日刊『晨報副鐫』、『雨天的書』所収）：「据哈利孙女士（J. Harrison）的研究，根据古代美术及宗教思想查考下去，舍伦与斯芬克思（Sphinx）等相同，原是一种妖怪（Ker）。最初只是死人的灵魂，想象为人首鸟身，但是神人同形的倾向渐占势力，灵魂亦化成人形，只剩下一副翅膀指示出旧时的痕迹，鸟身的女人遂变成死之凶鬼，撮魂催命的使者，即是舍伦了」：『周作人散文全集』第三巻四九八～四九九頁。

(24) “θεραπεία”をハリソンは、“service”または“tendance”としている。

(25) “ἀποτροπή”をハリソンは、“aversion”としている。

(26) “Prolegomena” Chapter I ‘Olympian and Chthonic Ritual’: “It is clear then that Greek religion contained two diverse, even opposite, factors: on the one hand the element of *service* (θεραπεία), on the other the element of *aversion* (ἀποτροπή). The rites of service were connected by ancient tradition with Olympians, or as they are sometimes called Ouranians: the rites of aversion with ghosts, heroes, underworld divinities.”. “Prolegomena to the Study of Greek Religion” (1903, Cambridge University Press, Cambridge) p. 10.

(27) 『論山母』（一九二八年一月一日刊『北新』二巻五号）付記（一九二七年一二月一一日付）:「这本《希腊神话》虽只是一册百五十叶的小书，却说的很得要领，因为它不讲故事，只解说诸神的起源及其变迁（大抵根据那本《序论》，）是神话学而非神话集的性质，于了解神话上极有用处。」:『周作人散文全集』第五巻、四〇六頁。

(28) 『論鬼臉』（一九二五年八月三一日刊『語絲』第四二期）。

(29) 『「希臘神話」引言』（一九二六年八月二八日刊『語絲』第九四期）。

(30) 『論山母』（一九二八年一月一日刊『北新』二巻五号）。

(31) 『論鬼臉』付記（一九二五年八月三一日刊『語絲』第四二期）:「與『宗教研究序論』第五章「妖怪論」所說略同」

(32) 『論山母』（一九二八年一月一日刊『北新』二巻五号）付記（一九二七年一二月一一日付）:「本书中三四章我最喜欢」:『周作人散文全集』第五巻四〇六頁。

(33) 『論鬼臉』（一九二五年八月三一日刊『語絲』第四二期）:「這是希臘的美術家與詩人的職務，來湔除宗教中的恐怖分子。這是我們對於希臘的神話作者的最大的負責。」“It was the mission of the Greek artist and the Greek poet to cleanse religion from fear. This is the greatest of debts that we owe to the Greek myth-maker.”. “Mythology” (Marshall Jones Company, Boston, 1924.11) p. 72.

(34) “Mythology” ‘Conclusion’. “This debt is two-fold. We owe to Greek mythology, first, the heritage of a matchless

imagery,（中略）second, a thing, as we shall see, intimately connected with this imagery, the release of the human spirit in part at least from the baneful obsession of fear.（中略）It is that from religion Greek mythology banished fear, which poisons and paralyzes man's life.（中略）How was fear banished? By making of beautiful images.": "Mythology" pp. 142–145.

(35) "Mythology" 'Conclusion': "His terror can only be abated by a Renaissance, a rebirth of the old Greek habit of thinking in calm, beautiful imagery.": "Mythology" p. 146.

(36)『希臘閑話』（一九二六年一二月二四日刊『新生』一巻二期）:「以上都是希腊的使恐怖与丑恶化美的显例。这一种〝美化〟的精神，便是希腊人现世主义与爱美观念充分的表现，于文化进化至有关系，欧洲中古的黑暗时代之变为文艺复兴，可以算是一种实例。」

(37)『希臘神話二』（一九三四年五月刊『青年界』五巻五期）、『我的雜學之六』（一九四四年六月一一日刊『華北新報』）、『希臘之餘光』（一九四四年八月刊『藝文雜誌』七―八期）。

(38) Robert Ackerman "The Myth and Ritual School: J. G. Frazer and the Cambridge Ritualists" (1991. Garland Publishing, Inc. New York & London)

(39) ハリソン宛マレー書簡（一九〇九年一二月）。Ackerman "The Myth and Ritual School" p. 100より引用。"I have been re-reading Die Geburt der Tragödie. Have you read the book at all lately, it is real genius, and if you hate the German there is a French translation."

(40) "Prolegomena" Chapter I 'Olympian and Chthonic Ritual' "Greek religion for all its superficial serenity had within it and beneath it elements of a darker and deeper significance.": "Prolegomena" p. 10.

(41) 苦悩からの逃避ではなく、むしろ苦悩と直面し、これと戯れること。

(42) 美しい仮象、芸術的形象の世界による慰撫・救済。

(43) "Themis" 'Preface to the Second Edition' "Disciple as I am in this matter of Nietzsche, I ought never forgotten that

humanity needs not only the intoxication of Dionysos the daimon (who is the escape into the suffering will behind phenomena), but also, and perhaps more, that 'appeasement in form' which is Apollo the Olympian.": "Themis: a Study of the Social Origins of Greek Religion" (1927, Cambridge University Press, Cambridge) p. viii. なお初版は一九一二年。